

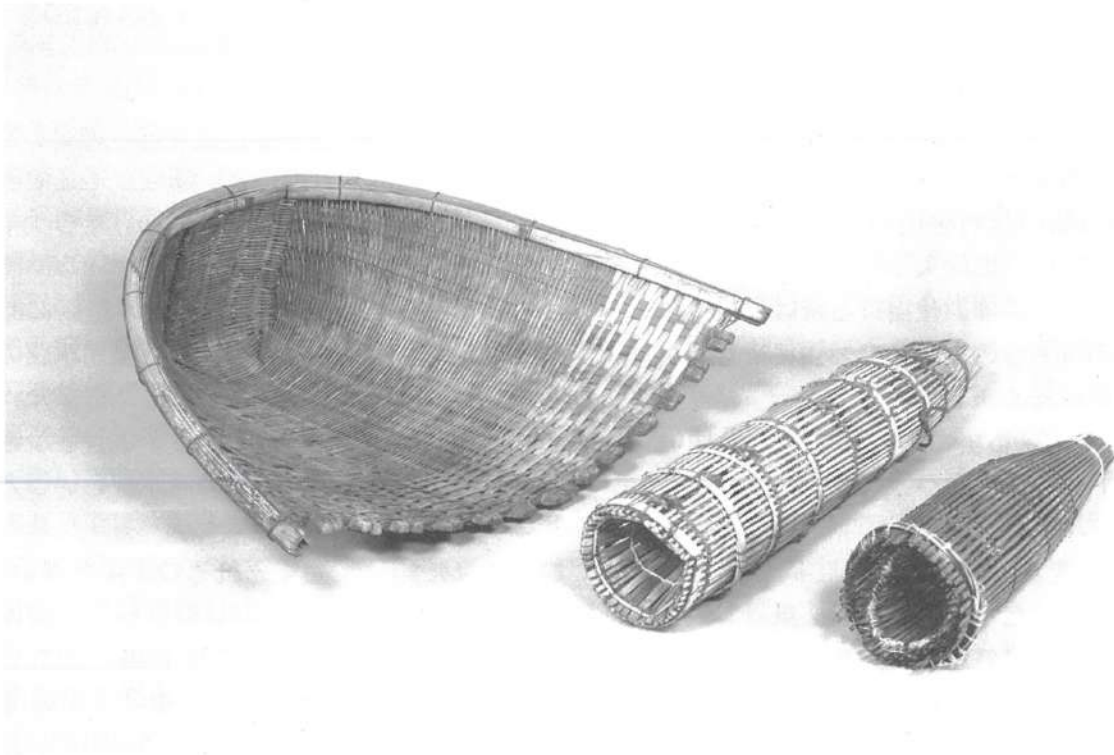
ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2026年3月20日

No.155



田んぼや用水路の魚をつかまえる漁具
左からザッコミ、ウナギドウ、ドジョウドウ

もくじ

- 1-2 田んぼとくらし
その4…田んぼで魚をつかまえる
- 3 展示会案内
企画展 江戸時代の冠婚葬祭
- 4-5 NOTE
猿渡盛章の官位申請・取得
- 6 series 戦後80年－府中と戦争
④戦時下で働く児童・生徒
- 7 最近の発掘調査
「鷹」の墨書土器を発見
- 8 天文はじまり物語
④日本の宇宙開発のはじまり

田んぼとくらし

かつて府中市内にはたくさんの田んぼがありました。そこは単に米づくりの場所というだけではなく、さまざまな役割や用途がありました。そうした府中の田んぼと人々とのかかわりを4回にわたって紹介してきたシリーズの最終回です。

その4…田んぼで魚をつかまえる

府中の田んぼは、多摩川から水を引いて稲作を行っています。かつては用水路を通じて、川に棲む魚が田んぼへたくさんやってきました。そのころは上の写真の漁具を使って、田んぼや用水路にいる魚をつかまえました。



天文はじまり物語



④日本の宇宙開発のはじまり

天文・宇宙に関する様々な「はじまり」をお伝えしてきたこのシリーズも最終回です。

★ペンシルロケット

終戦から7年後の1952年（昭和27）。禁止されていた航空事業が再開され、日本でもジェット機などの開発が始まりました。そのような時代のさらに先を見据えていたのが、のちに日本の「ロケットの父」とも称される糸川英夫博士です。

糸川は1954年、ジェット機以上に知られていなかった「ロケット」を作るため、幅広い分野の専門家を招集します。ただ、彼が当初想定していたロケットは、宇宙が目的地ではなく、太平洋を20分で横断できる「ロケット旅客機」でした。

実験を行うために、ロケットを試作することとなりますが、研究開始時はまだ予算も物資も乏しかったため、糸川たちは既製の材料から、工夫してロケットを組み立てていきました。

最初のロケットは、戦時中バズーカ砲に使われていた火薬を燃料に転用し、その燃料をうまく詰められるサイズのパイプで胴体が製造されました。そして生まれたのが、直径1.8cm、長さ23cm、重さ200gの「ペンシルロケット」でした。

ロケットはもちろん空に向かって打ち上げるものですが、ペンシルロケットの実験では、水平発射、すなわち横向きに飛ばされました。最初の射場は、府中市のお隣、国分寺市の、現在の早稲田実業学校構内にありました。

水平発射したこともまた、必然ではなく、研究者たちの工夫の産物です。高速で上昇していくロケットを捕捉するレーダーがまだ作れなかったため、限られた敷地内で水平に発射し、高速度カメラや、電気信号を計測するオシロスコープで、ロケットの飛び方を観測したのです。都内で上に打ち上げると、回収が難しいこともおそらく関係していたでしょう。

★そして大空へ

ペンシルロケットで基礎的なデータを得た日本のロケットは、1955年に秋田県に場所を移し、いよいよ上に向かって打ち上げられます。この時のロケットは全長30cmの「ペンシル300」で、到達高度は600m。日本のロケットが空高く飛翔をはじめました。

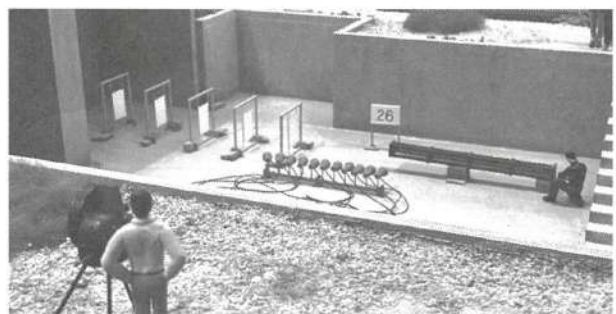
糸川の情熱に応えるかのように、日本は国際地球観測年（IGY）の宇宙観測に参加することを表明。2年後の1957年から翌年までの間に、宇宙を目指しロケットを飛ばすこととなります。

ロケットは急ピッチで大型化が進んでいきますが、まだ当時は馬車でロケットを運び、砂浜で打ち上げていた状態でした。しかしそこから日本のロケットは、数々の困難を乗り越え、期限内に高度60kmに到達。IGYに課せられていた観測の責任を無事に果たし、世界の宇宙開発の仲間入りをしたのです。

★夢の先へ

現在、日本が世界に誇るロケットたち。全長60mを超えるものすらありますが、それらすべてが、23cmのペンシルロケットをルーツとしています。

小さな小さなはじまりでしたが、大きな夢を持ち、それを叶え、そして夢すら超えていった偉大な「はじまり」だったのですね。（小林善紹）



ペンシルロケット水平発射実験場模型
ロケットを半地下壕で水平に発射し、高速度カメラなどで撮影、観測を行っている（国分寺市製作・当館展示）。